

創 建

そうこん

2001・7・7 VOL.36 NO.2 (通巻107号)

巻頭言／若井 正一・1
 インド西部地震被害調査報告／S. N. バリーク・2
 「博士への道」シリーズ1・4
 平成14年度卒業研究テーマ・6
 平成13年度卒業研究受理者・8
 新任の先生・10
 建築学会第46回東北支部研究報告会・10
 競技設計で経済産業大臣賞・12

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

誘われて大相撲五月場所の千秋楽に出掛けた。千秋楽の両国界隈は、相撲人気やや低調と言われる昨今、やはり、一種独特の雰囲気がある。当日は、優勝がかかった横綱同士の大一番があるということで、早々と満員御礼の垂幕が下がった。テレビで観る大相撲と違って、詳しい解説がないせいか、注意して観ていないと取組みは意外に淡々と進んでいく。その国技館には、観客のざわめきの中に、東西の力士の名を呼ぶ呼出や行司の張りのある声、勝ち力士の決まり手を知らせる場内アナウンス、観客席からの声援などがこだまする。そんな雰囲気の中、人気力士が登場した時や熱戦があった時には、会場全体が一瞬、大きな歓声に包まれる。

いつもより早めの中入りとなって、勝負審判が交替のために土俵周囲が少し静かになった頃、周囲の観客席から突然に大きな歓声が上がった。その歓声の主は、ロイヤルボックスに現われた「時の人」小泉首相に向けられたものであった。喧喧諤諤の自民党総裁選の後に新首相となった小泉首相は、自らを変人と公言してはばからない。その変人の意味は、「変革の人」なそう。その気は、すさまじいもので、会場の各所から「小泉さ～ん！」と、声が掛けられ、手が振られる度に、新首相も盛んに手を振って応えていた。この光景は、最後の一番まで、土俵の取組みの合間ごとに何度も繰り返された。

さて、千秋楽の大一番は、貴乃花が武蔵丸にあっさり負けて、優勝決定戦となり、そこで貴乃花が逆転優勝したのはご承知のとおりである。この時の小泉首相の様子は、まさにロイヤルボックスから身を乗り出し

小躍りしていた。その後、土俵上で自らの手から総理大臣杯を渡す際に、「感動した！」と発言した場面は、テレビなどで何度も報道された。

新首相が日本の景気低迷の救世主となれるかどうかは、今後の動向を慎重に見極めなければならないが、間近にみた今回の光景から、今までの政治家のイメージとは何か異なる新しい息吹を感じたひと時であった。

この大相撲でのエピソードを本学のF教授に何気なく話したところ、なんと小泉首相は高校時代の同級生

『環境移行』

若井 正一

だったということで、一緒に撮った最近の写真を見せられた。世の中は、実に狭いものだと、痛感した。

さて、本学科のカリキュラムは、この4月から新たに4つのコース制となった。この新コースを履修するのは今年入学した1年生からなので、その成果の程は数年後のことになる。また、2年生以上にとっても、この4月から設計演習関係の教育環境が大きく変わった。それは、製図板を前にした設計教育から建築CADによるパソコンを使った設計教育への変革である。この設計教育の体制を変えることについては、情報分野の急速な進展を背景にして、設計担当教員の間でも何度か論議を重ねた。その結果、新カリキュラムの導入に合わせる形で、現有の3つの製図室

を全面的に建築CAD室に改造して、各室に40台、計120台のパソコンを配備した。一部に製図板を残しているが、ハード面ではCADによる設計教育の環境がほぼ整備された。これは、本学科のみならず学部当局にとってもかなりの英断であったが、今後、ソフト面の指導体制が整うに従い、必ずやその成果が表れるものと確信している。

今回、本学科が設計教育にCADを導入したことは、特別なことではない。すでに、建築系の学科を持つ大学の多くがCADによる設計教育を導入しており、建築設計事務所等の実務設計の現場ではCADによる設計が当たり前のこととなっている。それから考えると、本学科の導入は、むしろ遅い方かも知れない。今後、設計教育の分野ではコンピュータを利用した情報技術が、一層進化することが予測される。しかし、手描きによる建築設計を学んできた世代にとっては、急速な設計環境の変化を憂える者も少なくないようだ。筆者自身も手描きによる設計教育を受けた一人であるが、縁があって数年前から、文部科学省の外郭団体である私立大学情報教育協会において建築の各専門分野に情報教育を推進する研究委員を拝命している。その研究活動の中で、最新のコンピュータ・システムを各大学が次々と導入する動向をいつも横目で見ながら悔しい思いをしていたのである。

人間の環境は、絶えず変化する。この「環境移行」の多様な場面には、その前後の変化を読み取る面白さが潜んでいて、大いに研究上の興味がそそられる。特に、建築的な場面に「環境移行」が多いようだ。(教授)

インド西部地震被害調査報告

専任講師 Sanjay Pareek

■調査概要

本地震の名称は、Gujarat州、Kachchh地方、あるいは特に大きな被害を被ったBhuj市などの地名からGujarat地震、Kachchh地震、Bhuj地震などと呼ばれている。今回の地震による被害は、死者2万名、負傷者16万6千名（うち重傷者2万717名）、全壊家屋37万戸、半壊家屋92万戸、被災総額2126億ルピー（約6千億円）という大災害となっている（インド政府発表3月20日現在）。

被害調査班はRoorkee大学地震工学部（部長Prof. K. K. Paul）にカウンターパートを依頼して3名が参加、日本側10名（団長：山口大学・村上ひとみ；工学院大学・久田嘉章；京都大学・林 康裕；京都大学・澤田純男；鹿児島大学・Venkataramana Katta；東京大学・目黒公郎；東京大学・Pradeep Kumar Ramancharla；東京大学・上半文昭；毎日放送・小野志保；著者）と併せて13名という大チームとなった。図1に示すように、まず3月5日（及び10日）に震央距離約250kmにも関わらず大きな被害を生じたAhmedabad市で建物被害調査や建物・地盤の微動観測を行い、同時にGujarat州の州都Gandhinagarでの政府対応などの情報収集を行った。その後、3月6～9日に震源地であるKachchh地方を中心とした被害調査を実施した。主な調査内容は、Bhuj市や大被害を受けたその周辺の市・村における各種構造物の被害調査、MSK震度調査、アンケート震度調査、Gandhidham市における建物・地盤の微動観測及び全戸調査（約160棟）、建築材料の収集などである。震央域では余震で被災する危険を避けるため、テント等野営道具を持参し、日本赤十字の紹介により国際赤十字のキャンプ村に滞在させて頂くことができた。現地調査の間はトヨタ4WD型の自動車4台（運転手付レンタカー）により移動した。その後、11日に首都Delhiの政府機関、及びRoorkee大学・地震工学部を訪問し、12日

にデリーを発ち13日に帰国した。

■被害分布

グジャラート州の中では人的被害の92%がKachchh地方で発生した。インドでは耐震規定があるものの強制でないため、新しい公共建築物を除いて殆ど考慮されることはない。Ahmedabad市（周辺を含めて人口580万人）では、ピロティ形式の中低層（約60棟）及び高層RC造（3棟）に被害が集中し、約750名の方が亡くなっている。

一方、震源地であるKachchh地方の被害統計を表1に示す。RC造被害に加え、Kuchha（アドベ壁や藁葺きなど非恒久的住宅）やPucca（レンガ造、組積造など恒久的住宅）と呼ばれる脆弱な伝統的な組積造家屋に被害が集中し、1万8千名以上の死亡者が出ている。特に震源地に近いBhachau市とその周辺地域（Taluka）で最も被災度が高く、ここだけで全死者数の3分の1以上に相当する約7千4百名の方が亡くなり、死亡率が6.4%に達している。

■鉄筋コンクリート造建物の被害

RCはフレーム構造で、一般に壁が無補強のレンガやコンクリートブロックなどのインフィルで構成されている。まずAhmedabad市の高層RCアパートを例に被害を概観する。写真1、写真2は、地上ピロティ階+10階建のアパートであり（Mansi Complex）、写真に見える高層アパートの手前側にある同タイプのアパートが完全崩壊した。Ahmedabad市にはFloor Surface Index（FSI）と呼ばれる基準階の床面積制限があるが、2階以上には適用されない。このため片持ち梁で2階以上部分を外側にせり出し、トップヘヴィな構造となっている。激震地であるBhuj市でも、RC造では1階のピロティ階の被害が目立った（写真3～写真6）。ピロティでないRC造の被害は一般に小さかったが、大きな被害を受け

表1 Kachchh（カッチ）地方の郡別被害統計

Name	Residential Houses	Households	Population	No. Dead	Dead %
BHJJ	55091	55486	277215	4503	1.62
MUNDRA	13814	13945	68652	65	0.09
MANDVI	27745	27876	146034	72	0.05
ABDASA	16977	17070	86402	19	0.02
LAKHPAT	7414	7416	36759	2	0.01
NAKHATRANA	21291	21610	116944	23	0.02
RAPAR	24195	24273	150517	732	0.49
BHACHAU	22796	22944	114759	7424	6.47
Anjar (#1)	31870	32176	160640	4702	2.93
Gandhidham (#2)	20662	20743	104585	861	0.82
Total	241855	243539	1262507	18403	1.46

1 : ANJAR Taluka except for Gandhidham

2 : Gandhidham city area (originally belongs to Anjar)

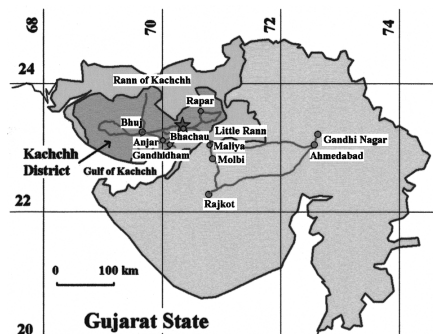


図1：Kachchh地方、及び主要な都市と調査ルート

ているRC造では材料の不良、柱頭の強度不足及び配筋不良などが目立った。

Gandhidhamは1950年代に造られた新しい街で、各種のRC造が存在する。また被害の大きな街区と小さな街区とが明瞭に分かれていた。このため建物と地盤の常時微動観測を行うとともに、約160棟の全数調査を行った。また材料実験を行うため、各種の建築材料も入手した。同様にAhmedabad市では、市の南側に被害が集中していたため、各地で建物と地盤の常時微動観測を実施している。

■組積造建物の被害

今回の地震で圧倒的に被害が多かった建物は、Bhuj市やAnjar市などで城壁に囲まれた旧市街地や周辺の村に多い伝統的な組積造であった(写真7~写真12)。壁は不整形な自然石を粘土モルタルで積み上げており、屋根が木造で水平面の拘束力がないため、地震に極めて脆弱な建物である。一方、整形した石やコンクリートブロックをセメントモルタルで積み上げ、さらに床や屋根がRC造の家屋は、無補強ながらはるかに強い抵抗力を示していた。宮殿や城壁などの歴史的建造物は整形した石を強度ある石灰モルタルで固められており、通常の家屋に比べて被害は比較的軽微であった。

■おわりに

被災地では全壊家屋だけでも37万戸に達し、約185万人が家を失った。グジャラート州政府の対策本部によれば、雨期に入る前に最小限の仮設シェルターを与える必要がありその緊急対策を進めているとのことである。被災町村を、復興支援してくれる国内外の組織を募っている。被災地の生活・経済が少しでも早く再建されることを願っている。

更に、被害を受けた地域に見られる補修・補強方法は必ずしも有効とは考えられないものがある。被害部分のみの補修・補強ではなく、構造物全体として力の抵抗機構をとらえる設計思想に基づいて補修・補強方法を考えることが重要であると考えられる。今後、日本の免震技術や、耐震補修・補強工法の技術移転に役に立てれば幸いである。

調査に際し東北支部長・日本大学教授岩崎博氏、京都大学教授防災センター長・中島正愛氏を始め多くの方々にご協力を頂き、記して感謝致します。

写真3(左): 5階RC造・ピロティの崩壊(手前の棟のピロティのみ生き残り、左と奥の棟のピロティが崩壊。Bhujにて)

写真4(右): 6階RC造・ピロティの崩壊(Bhujにて)



写真5: 残った高層棟のピロティ部(扁平な柱断面と、FS1により片持ち梁で2階以上の部分がせり出していることに注目)

写真6: 写真3と同じ建物の1階にある短柱の破壊



写真7(左): 伝統的な組積造の1階部分が崩壊した家屋(増築した2階組積造の損傷は小さい。Bhujにて)

写真8(右): 歴史的建築物(Prag Mahal: 整形した石を強固な石灰モルタルで固めている。塔の頂部にクラックが見られるが、一般家屋よりはるかに軽微な被害である。Bhujにて)

写真9(左): 伝統的な組積造家屋(壁は自然石を粘土モルタルで固めただけで、屋根は木造である。Bhujにて)



写真10(右): RCの床と屋根を持つ組積造家屋(RCによる水平面の拘束により抵抗力ははずっと強い。Bhujにて)



写真1(左): Mini Complex(写真に見えない高層アパートと同タイプの高層棟が手前にあったが、完全に倒壊した)
写真2(右): 倒壊した高層アパートの1階の様子



写真11: 建物の屋上から見た地震(三角屋根の伝統的な組積造家屋が大被害を受けている)の対し、RC屋根の新しい組積造は比較的被害が小さい。Bhujにて



写真12: 組積造の住宅倒壊。Bhujにて

「博士への道」 シリーズ No.1

博士論文「建築用ポリマーセメントモルタルの性状と調合設計に関する研究」
授与校：東京工業大学

教授 大濱 嘉彦



昭和47年に本学大学院工学研究科建築学専攻が設置されてから、はや30年になるが、博士後期課程への進学者は、相変わらず少なく、定員が満たされることは極めてまれである。このような進学者低迷の現状を憂えて、「創建」編集長の若井正一教授が、この「博士

への道」シリーズを企画されたと聞く。この現状を打破するためには、単に、私の経験した博士取得のプロセスのみを書いて仕方がないと考え、最初に、この現状打破のための鍵を探してみたい。

21世紀を迎えて、20世紀の「工業化社会」から脱出して、「知的／高度情報化社会」へと世の中が大きく変革しようとしている重要な時に、学生諸君が、「大学で勉強するということが」、「大学院へ行くということ」、「技術者（エンジニア）になるということ」、更には「働くということ」を正しく認識していないことが、博士後期課程進学者低迷の大きな理由と考えられる。その背景には、高校時代からのただ大学受験のみの対策としての詰め込み主義の勉強の結果、学生諸君の考える能力や知識を応用する能力の欠如、勉強する意欲の喪失、自立心が乏しく大人としての行動の欠如などが指摘される。

技術者を目指す学生諸君が、この21世紀を生き抜くことができる、ほんもの（本物）のパスポートを手にするための心構えを次にあげてみよう。

- (1) 循環型社会への移行、人口の高齢化又は少子化及び国際化の進展の中で、正しい価値観の下に、何がほんものであるかを見極める力を養い、大人としての自覚を育む努力をする。
- (2) プロ（professional）の精神構造を持つように変身し、想像力、好奇心、根性及びチャレンジ精神のバランスをとるように心がける。同時に、プロの誇りと責任感を持つようにする。
- (3) 国際化の進展に対応した英語の学力とコンピューター活用能力を含む幅広い基礎知識（学力）の上に、より高度の専門知識を充実させると共に、創造力のレベルアップに心がける。
- (4) 高度情報化社会において、情報を制御する力を身につける。「情報を制するものがすべてを制す

」といっても過言ではあるまい。

このような技術者に要求される心構えを実行に移すためのプロセスの最短距離が「博士後期課程」、すなわち、「博士への道」を目指すことではなかろうか。現在の大学院博士後期課程の教育は、「末は博士か大臣か」といわれた時代のそれとは異なっている。本学の学則によれば、博士後期課程では、「専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うこと」を目的とする教育が行われている。

私の博士へのプロセスは、博士後期課程へ進学し、博士論文を完成して博士の学位を取得する「課程博士」とは異なり、博士論文のみを提出し、厳格な審査を受けて博士の学位を取得する「論文博士」によるものである。私が、博士の学位を取得したころは、論文博士の方が主流であった。私の場合、指導を受けた大学の先生方や上司のアドバイスによって、「学問を究めること」に主眼を置いて研究を進めてきたので、ポリマーセメントモルタル（コンクリート）という当時としては新しい建築材料の開発に関する研究を達成した一つの「あかし」として、博士の学位を取得することを考えた。この時期は、建設省（現国土交通省）建築研究所在職時であったが、前職の小野田セメント株式会社[現太平洋セメント株式会社の前身]中央研究所の時からご指導頂いた、当時、建築材料学の泰斗であった故狩野春一博士から、同博士の教え子で東京工業大学建築学科の教授であった故吉岡 丹博士をご紹介頂いたことに、私の博士への道は始まったといえる。故吉岡 丹博士の熱心で心暖まるご指導を受けて博士論文を完成し、東京工業大学へ「建築用ポリマーセメントモルタルの性状と調合設計に関する研究」と題する博士論文を提出した。同博士を主査、他に4人の教授を副査として博士論文が審査され、昭和49年2月13日に東京工業大学から工学博士の学位を授与された。その後、私は、博士論文と同じ分野で研鑽を積んだことが外国でも認められて、平成8年には、ベルギーの著名な大学（ローマ法皇創立）であるルーヴァンカトリック大学から名誉工学博士号を授与された。

博士の学位を取得したならば、それが課程博士であろうと論文博士であろうと、そのことはほとんどどうんぬん

されることはない。これは、博士の学位取得のプロセスの中で、取得者の大変な苦勞や努力がなされたことを暗黙のうちに万人が認めるからであろう。私が博士の学位を取得してから約30年が経つが、各種の資格の中で博士の学位は、ほぼalmightyであると思う。日本では余り感じないが、欧米諸国では、博士の学位を持っていないければ技術者として恥ずかしい思いををするのではないかと考える。

私が博士の学位を取得したころは、課程博士は少なく、ほとんどが論文博士であり、取得するのに大変苦勞をしたことを思い出す。それに比べて、今日では、ほとんど

の理工系大学に博士後期課程が設置されており、前述のような目的で教育が行われ、比較的容易に博士の学位が取得できる雰囲気があると思う。高度情報化社会が進展すれば、科学技術の革新が目まぐるしく、課程博士のプロセスによる博士の学位取得は、技術者の最低限の資格になるものと予想される。すなわち、これからは、課程博士による博士の学位取得時が技術者としてのスタートラインになると考えられるからである。この拙文が、学生諸君にとって意識革命を起こすきっかけとなり、目的意識をもって、真の技術者として生きる道を創造してほしいと願っている。

朱 明 基 院 生、 博 士 (工 学) に

論文題目「オートクレーブ養生ポリマーセメントモルタル及びコンクリートの開発」

博士後期課程の朱明基院生は、日本大学より平成13年3月に博士(工学)の学位を授与された。
ここに論文の概要を紹介する。

一般に、オートクレーブ養生を行ったセメントモルタル及びコンクリートは、常温・常圧下で湿潤又は空气中養生を行ったセメントモルタル及びコンクリートと比べて、強度発現が早い、高強度が得られる、乾燥収縮やクリープが小さい、耐硫酸塩性に優れるなどの利点を有している。このため、オートクレーブ養生は、プレキャストコンクリート製品の製造に利用されている。更に、シリカ質混和材を混和し、オートクレーブ養生を行うことによって、セメントモルタル及びコンクリートの圧縮強度は著しく改善される。一方、ポリマーセメントモルタル及びコンクリートについても、プレキャスト製品としての利用が期待されるが、これまで、ポリマーセメントモルタル及びコンクリートへのオートクレーブ養生の適用に関する系統的な研究は、ほとんど行われていない。

本論文においては、オートクレーブ養生ポリマーセメントモルタル及びコンクリートを用いたプレキャスト製品の製造技術の基礎を確立する目的で、シリカ質混和材を含むポリマーセメントモルタル及びコンクリートの各種性質に及ぼす養生条件、シリカ質混和材の種類と置換率、ポリマーの種類及びポリマー結合材比の影響を明らかにし、優れた性能を持つオートクレーブ養生ポリマーセメントモルタル及びコンクリートを開発している。写真-1には、オートクレーブ養生SBR混入ポリマーセメントモルタル中に形成されたポリマーフィルムを示す。

本論文は、「オートクレーブ養生ポリマーセメントモルタル及びコンクリートの開発」と題し、全6章から構成されている。第1章は序論として、研究の目的と背景及

び研究の範囲、オートクレーブ養生ポリマーセメントモルタル及びコンクリートの意義、既往の研究及び用語について述べ、本研究の位置付けを行っている。第2章では、従来からよく使用されてきた高純度シリカと同等の効果を期待して、シリカの純度が低いことを補うために、比表面積を大きくし、その反応性を高めた高炉スラグ微粉末をオートクレーブ養生用混和材として試みる目的で、高炉スラグ微粉末及び高純度シリカを含むポリマーセメントモルタルの物理的性質に及ぼす製造条件の影響を明らかにしている。第3章では、高炉スラグ微粉末及び高純度シリカを含むポリマーセメントモルタルの中性化及び塩化物イオン浸透に対する抵抗性に及ぼす製造条件の影響を究明している。更に、オートクレーブ養生がポリマーセメントモルタルの組織構造形成に及ぼす影響を調べるために、セメント混和用ポリマーディスパージョンからポリマーフィルムを作製し、オートクレーブ養生皮及びCa(OH)₂の飽和水溶液浸漬状態でのオートクレーブ養生によるポリマーの劣化機構を解明している。第4章では、高炉スラグ微粉末及び高純度シリカを含むオートクレーブ養生ポリマーセメントモルタルの強さ性状に及ぼす製造条件の影響を究明している。更に、高性能減水剤を用いた高炉スラグ微粉末を含むオートクレーブ養生SBR混入ポリマーセメントモルタルの強さ性状を明らかにしている。第5章では、高炉スラグ微粉末を含むSBR混入ポリマーセメントコンクリートの高強度を得るための製造条件を見いだしている。第6章では、第2章から第5章までに得られた研究成果を総括し、本論文の結論としている。

平成14年度 卒業研究テーマ一覧

■材料工学

岩崎 博 教授〔論文〕

1. 伝統的建築材料の評価及び建築生産に関する調査研究
近年、土壁はヒトの身心への安らぎの付与、健康的な居住環境構成材料としての優れた諸特性及び廃棄後のリサイクルが容易な材料として、再評価され始めている。このため、下記の調査研究を行っている。
 - 1) 壁土の産出地別特性及び分類（壁土固有の構成因子である粒度組成、元素及び鉱物分析結果と土壁の基礎的性質である居住性、色彩、施工性からの総合化分類）
 - 2) 壁土の諸性質の評価（有害空気汚染物質等各種外因による吸着－放散特性試験を行い、脱臭、調湿、調温、空気浄化作用、色調、変退色、ひびわれ等の検討）
 - 3) 部材及び材料の改良開発（諸性質の向上、調合法の合理化等）
 - 4) 設計・施工技術の開発（壁塗り動作・こて圧解析等からの自動化施工、設計仕様の標準化）
2. 建築及び建築材料の需給構造に関する研究
 - 1) 新聞広告にみる戸建及び集合住宅の性能及び材料の採用動向調査
 - 2) 建築設計者を対象とした建築材料の採用意向調査
 - 3) 近未来建築物の諸性能に関する調査
3. 建築及び都市のマテリアルデザインに関する調査研究
 - 1) 文学作家及び画家と造園材料の嗜好傾向事例調査
 - 2) 街並み構成材料の地域特性に関する調査
4. 建築物のライフサイクルマネジメントに関する調査研究

大濱 嘉彦 教授〔論文〕

【新材料及び工法の開発】

1. 有機物と無機物の複合による超高強度コンクリートの開発
2. 自己修復機能と自己防錆機能を持つインテリジェントコンクリートの開発
3. ビニロン及び炭素繊維補強モルタル及びコンクリートの性状及び用途開発（人工木材など）
4. ポリマーセメントモルタル及びコンクリート中のポリマーとセメントの相互作用
5. 建築材料としての新素材の利用の可能性
6. ポリマーセッコウ複合体の開発
7. 廃棄発泡ポリスチレンを用いたポリマーコンクリート及びモルタルの開発

【材料の耐久性】

1. 各種コンクリートの耐久性
2. コンクリートの耐久性に関連した東北地方における塩化物イオン分布状況調査
3. アルカリ骨材反応の防止策及び促進試験方法

【材料の試験方法】

1. セメント混和用ポリマーディスパージョンの迅速性能判定法
2. ポリマーモルタル及びコンクリートの各種試験方法の開発

出村 克宣 教授〔論文〕

1. 建築材料用教材のビジュアル化に関する調査研究

2. セメント系傾斜機能複合材料の開発
3. RC造建築物用補修材料・工法選択システムの開発
4. ポーラスコンクリートに関する調査研究
5. 環境浄化機能を有する建築材料の開発

渡澤 正典 専任講師〔論文〕

1. コンクリート構造体の耐久性向上
2. コンクリート構造体の強度推定
3. 産業廃棄物のコンクリート製品への利用
4. オートクレープ養生コンクリートの品質改善
5. スラッジの有効利用に関する研究

■構造

倉田 光春 教授〔論文〕

1. 構造フォームに関する研究
自然界の進化アルゴリズムによって出現するかたちとつよさの神秘さを自然観察あるいは、経験則に基づく感覚的・実験的構造学で考察し、コンピュータシミュレーションによる検証を行う。
2. 構造解析法に関する研究
各種構造物について、構造形態の最適化手法の開発や、弾塑性解析を行う。
3. 地盤・建物の地震時挙動に関する研究
振動応答解析法の開発あるいは、地震波入力による地盤および建物モデルの振動実験と地震応答解析を行う。
4. 空間構造（シェル・立体構造）に関する研究
単層ラチスシェルの座屈実験と解析のための鋼管材の局部座屈に関する実験および解析を行う。
5. 構造材料に関する研究
コンクリートおよび鋼材に関する実験および解析を行う。
6. 建築における情報技術の利用に関する研究
7. その他
免震・制震構造に関する研究、海洋構造物の解析に関する研究など各自あるいは、グループの希望テーマを面接の上決定し、それに沿って研究を行う。

黒田 浩司 教授〔論文〕

1. 柱・はり接合部の挙動、耐力に関する研究
 - 1) 高強度コンクリート及び高強度鉄筋を用いた接合部の実験・解析※
 - 2) 鉄鋼造接合部の実験・解析
2. 耐震補強改修に関する研究
 - 1) 炭素繊維シートを用いたはりの補強実験・解析※
 - 2) その他改修法について実験・解析
3. RC造及びS造用耐震診断のプログラム化
4. その他、構造設計に関する研究
※1. 1)、2. 1) はパーク専任講師との共同研究

浅里 和茂 助教授〔論文〕

1. 鋼構造柱・はり接合部の挙動に関する実験的研究
2. 鋼構造部材・部位の局部座屈に関する実験的研究
3. 鋼構造物の弾塑性解析
4. 情報技術を利用したシステムおよびコンテンツの開発
1, 2は黒田浩司教授と共同研究

千葉 正裕 助教授〔論文〕

1. 建物の近似振動解析法に関する研究
2. 情報研究棟およびその周辺地盤における地震動観測
3. 細長い平面形を有する建物の多点常時微動測定
4. 郡山市域の地盤および建物の振動性状に関する研究
（振動計測車の活用：倉田教授と共同）
5. 建物・杭・地盤連成振動系解析に関する研究
6. 各種構造解析プログラムの開発

パリーク サンジェイ 専任講師〔論文〕

1. 高強度コンクリート及び高強度鉄筋を用いた接合部の実験・解析※
2. 炭素繊維シートを用いたはりの補強実験・解析※
3. 複合構造部材の研究開発
4. 複合材料の力学的性状に関する研究
※1.、2.は黒田教授との共同研究

■人間環境・インテリア・設計

若井正一 教授〔論文・設計〕 〔論文〕

1. 人間環境系からみたヒトの行動特性に関する研究
2. 人間環境系からみた環境心理学的諸問題の研究
3. インテリアスペースにおけるヒトとモノの関係
4. 色彩情報をもとにした視覚的諸問題に関する研究
5. その他(新規課題は、相談に応じます)

〔設計〕

1. 意外性のある空間の設計
2. 新しいインテリアスペースの提案
3. その他(学内外のコンペ課題も可とする)

私たちの生活場面の中には、まだまだ解決すべき多様な問題が隠されています。論文、設計ともに問題意識を持って興味を抱くテーマを自ら定めることとなります。

特に、論文は、各テーマともに人間環境系の視点から、住まいやオフィスなどの具体的な場面を研究対象にして調査または実験の両面から問題点を探求するものです。

また、設計は、既存の概念にとらわれない自由な発想のもとに意外性のある空間などを独自に提案するもので、学内外のコンペなどに応募することを勧めます。

なお、テーマの内容によっては共同研究を認めます。環境心理学やインテリアなどに興味を持つ協調性のある卒研究生を歓迎します。

■環境工学・建築設備

濱田幸雄 助教授〔論文〕

1. 音響透過損失測定におけるJIS残響室とISO試験室の違いの影響に関する研究
2. 音響透過損失測定における支持条件の影響に関する研究
3. 多層膜構造の吸音特性に関する研究
4. 福島県のサウンドスケープに関する研究
5. 構造体からの音響放射に関する研究

八町雅康 専任講師〔論文〕

1. 燃焼器具と室内空気汚染に関する研究
2. ランドサットデータ利用に関する研究
3. アメダスデータのデータベース化に関する研究
4. ホームページ(設備用教材)の作成の試み
コンピュータ又はプログラム開発に関する希望があれば、相談の上、受入れます。

■建築史

狩野勝重 教授〔論文〕

1. 近世社寺建築の調査と研究
2. 東北地方における棟札調査
3. 文化的資産を活用した環境整備計画
4. 日本的都市のアイデンティティーについて
5. 地籍図の語る史的意味合
6. 自立型環境共生集落の形勢プロジェクト
7. その他、町づくりなど

■建築計画・設計

佐藤平 教授〔論文・設計〕

清水公夫 非常勤講師〔設計〕 〔論文〕

1. 高齢者・障害者の為の住生活環境(特に安全性、快適性、利便性、保健・衛生性、使われた等から見た)に関する研究
2. 特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、経費老人ホーム、デイサービスセンター、グループホーム等高齢者のための社会福祉施設の建築計画に関する研究
3. 老人保健施設等の医療施設の建築計画に関する研究
4. 障害者の職場環境に関する研究
5. 高齢者の余暇活動と地域施設の関係に関する研究
6. やさしい街づくりの現状と未来像に関する研究
7. 保育所と幼稚園の関係に関する研究
8. 無認可保育所の分布と規模分析に関する研究
9. 学校の空き教室のあり方に関する研究
10. その他希望があれば相談に応じます

〔設計〕

卒業設計を選択するものも夏休み前までは、卒業論文を選択したものと同じようにテーマを決めて毎週自分で研究した内容について発表してもらいます。

また都合良く適当なコンペ等があった場合はそのコンペに参加して貰うこともあります。後半は自分の卒業設計の作品に取り組んで貰います。

松井壽則 助教授〔論文・設計〕

1. 高齢化社会に対応した住生活環境整備に関する研究
 - 1) 高齢化対応住宅に関する調査研究
 - 2) 高齢社会に対応した住宅施策展開に関する調査研究
 - 3) 身体障害者、高齢者などに配慮した住宅計画に関する調査研究
2. 高齢者に対する福祉サービス提供施設に関する研究
 - 1) 通所型住宅サービス提供施設に関する調査研究
 - 2) 特別養護老人ホームの計画に関する研究
 - 3) グループホーム(ユニットケアを含む)の計画に関する研究
3. 住宅・住宅地に関する調査研究
 - 1) 住宅団地の再生並びに更新に関する調査研究
 - 2) 公営集合住宅の時系列的変遷に関する調査研究
 - 3) 公営集合住宅の外部空間を核とした交流空間に関する調査研究
4. 児童・生徒に対する建築教育の可能性に関する実践研究
5. 保育園・幼稚園の計画に関する研究
6. 特殊学級、養護学校に関する調査研究
7. 上記テーマに関する設計

注意事項：希望者は、2年次、3年次設計課題をそれぞれ1作品、計2作品を持参し、設計の内容についての意見交換をおこない、選考の参考とします。

また、先方の都合により調査を行なうことになるので、講義に追われずに済むよう、できるだけ必要な単位は3年次生で修得しておいて下さい。

五十嵐徹 非常勤講師〔設計〕

フィールドワークの結果を小論文にまとめ、その内容を設計提案する。

注意：これまでの設計課題を数点持参してください。

■都市計画・設計

有賀保二 助教授〔論文・設計〕

1. 地方都市における地区レベルの町づくりの研究

2. 商店街構成に関する調査研究
3. 都市景観に関する研究
4. 地区計画設計

論文・設計とも基礎調査として現況調査、文献調査を行い、現況分析より問題点を抽出、その要因を探求し、その結論を論文又は図面として表現する。

テーマについては、ミーティングの進行状況の中より各自の具体的な研究テーマを決定する。

調査についてはグループで行い、論文、設計とも個人、又はグループでもよいが各自の分担を決め、まとめを行う。

土方吉雄 助教授〔論文・設計〕

1. 都市の土地利用に関する研究
 - 1) 土地利用の更新過程
 - 2) 用途地域制
 - 3) 都市マスタープラン
 - 4) 地方都市中心市街地の再活性
2. 住宅・居住環境整備に関する研究
 - 1) 住宅需給
 - 2) 都心居住
 - 3) 子供の遊び環境
 - 4) 近代化遺産とまちづくり
 - 5) 住宅マスタープラン・HOPE計画
 - 6) 市街地整備事業の評価手法
3. 都市設計、まちづくり

*設計では、CADに興味のある人を特に希望します。

三浦金作 助教授〔論文・設計〕
〔論文〕

1. 西欧都市の研究
 - 1) 水都・ヴェネツィアの都市空間に関する研究
 - 2) ハンザ都市・リューベックの都市空間に関する研究
2. イタリア広場の研究
 - 1) 視覚的構造と広場のスケールについて
 - 2) 広場の形態分析
 - 3) 広場空間における人間の滞留行動について
3. 都市緑地の研究
 - 1) 都市河川空間の整備に関する基礎的研究
 - 2) 子供の遊び場について
 - 3) 公園整備と共同住宅の立地について
4. 外部空間の研究
 - 1) 駅前広場の空間構成について
 - 2) 公開空地等のあり方について
 - 3) スモール・アーバン・スペースの使われ方について
5. 景観の研究（日本、外国事例）
 - 1) 都市景観の史的研究
 - 2) 都市景観イメージと評価
 - 3) 景観条例とまちづくり

〔設計〕

設計希望者は、これまでの課題図面を持参して下さい。
※論文、設計とも「積極的で元気のよい人」「協調性のある人」「西欧都市に興味のある人」「語学が好きな人」を希望します。

平成13年度 建築学科卒業研究 受理者一覧

学生番号	氏名	指導教員	学生番号	氏名	指導教員	学生番号	氏名	指導教員
102001	相田 貴浩	岩崎教授	102028	伊藤 匠	若井教授	102053	岡崎紀代子	岩崎教授
102003	青柳 政寿	倉田教授	102029	伊藤 透	狩野教授	102054	岡部 愛章	千葉助教授
102004	秋吉 崇博	渡沢講師	102031	稲葉 陽子	若井教授	102057	小沢 直之	佐藤教授
102005	浅川 依里	岩崎教授	102032	稲益 邦明	パリーク講師	102058	小澤 真紀	松井助教授
102006	東 智子	三浦助教授	102033	今井 純也	狩野教授	102059	押田 渉	倉田教授
102007	吾妻 祐哉	三浦助教授	102034	岩崎実由記	渡沢講師	102060	忍田 洋一	浅里助教授
102008	阿部 千秋	松井助教授	102035	岩下 智樹	松井助教授	102061	小田桐麻衣子	土方助教授
102009	新井 英司	黒田教授	102036	上野 良太	濱田助教授	102062	落合 一男	千葉助教授
102010	荒木 尚久	有賀助教授	102037	宇秋 哲也	大濱教授	102063	親松 実	清水講師
102011	安齋 裕紀	春山講師	102038	薄井 静香	岩崎教授	102065	梶川 聡	佐藤教授
102012	安藤 篤史	倉田教授	102039	内田 崇	松井助教授	102067	加藤 宏明	渡沢講師
102013	安藤 徹	倉田教授	102040	内田 拓郎	橋本助教授	102068	川上 誉貴	渡沢講師
102014	安藤 尚之	橋本助教授	102041	内海 紘太	千葉助教授	102069	川口 正人	千葉助教授
102015	飯村 寿	春山講師	102042	卯月 勝浩	岩崎教授	102070	菅野 長睦	土方助教授
102016	五十嵐国宏	春山講師	102043	江野 貴也	濱田助教授	102072	菅野 有希	松井助教授
102017	池田 勉	黒田教授	102044	遠藤 勝久	三浦助教授	102073	関軒 直子	岩崎教授
102018	井腰 晃紀	有賀助教授	102045	遠藤 哲朗	橋本助教授	102074	菊池 健二	千葉助教授
102019	石井 大介	千葉助教授	102046	大内 リエ	若井教授	102075	菊池 崇	渡沢講師
102020	石井 宏典	有賀助教授	102047	大岡美紗恵	千葉助教授	102076	北村亜依子	佐藤教授
102021	石田 昭臣	岩崎教授	102048	大迫 重哉	八町講師	102077	木下 裕介	土方助教授
102022	石原 詞郎	小栗助教授	102049	大嶋 洋司	橋本助教授	102078	木村 雅英	佐藤教授
102023	石山 和幸	黒田教授	102050	大杉 武史	三浦助教授	102079	吉良 睦実	土方助教授
102025	市毛大路郎	パリーク講師	102051	大谷 和泉	若井教授	102080	久保田裕人	有賀助教授
102027	市原 浩之	春山講師	102052	大森 陽太	千葉助教授	102081	倉恒 大輔	渡沢講師

学生番号	氏名	指導教員	学生番号	氏名	指導教員	学生番号	氏名	指導教員
102082	栗林 直輝	有賀助教授	102139	武田 徹	出村教授	102196	宮本 和彦	三浦助教授
102083	黒川 貴志	岩崎教授	102140	多田出晃代	橋本助教授	102197	宮本 勇一	大濱教授
102084	郡 久子	若井教授	102142	田中 倫史	三浦助教授	102200	村上 勝	濱田助教授
102085	國分千寿子	松井助教授	102143	田邊 和也	三浦助教授	102201	森 友一	濱田助教授
102086	小杉 香織	若井教授	102144	田邊 静香	土方助教授	102202	諸岡 淳史	大濱教授
102088	小林久美子	濱田助教授	102145	玉水 大介	濱田助教授	102203	安本 琢	若井教授
102089	寺本 丈二	有賀助教授	102146	土田 真一	土方助教授	102204	矢部 幾子	橋本助教授
102090	今田 建治	土方助教授	102147	土屋 友彦	岩崎教授	102206	山北 和樹	狩野教授
102091	今野 高志	岩崎教授	102148	綱井 邦博	岩崎教授	102207	山岸 拓野	千葉助教授
102092	西海知寛明	佐藤教授	102149	円谷 和智	倉田教授	102208	山口 章子	八町講師
102093	齋藤 雄介	有賀助教授	102150	富沢 将之	土方助教授	102209	山口 秀剛	橋本助教授
102094	酒井 孝幸	黒田教授	102151	富田 光洋	佐藤教授	102210	山崎 宏介	倉田教授
102095	坂入 達也	有賀助教授	102152	豊田 英敏	倉田教授	102211	山崎 里支	土方助教授
102096	佐久間 涼	有賀助教授	102153	内藤 正純	倉田教授	102212	山田 拓哉	狩野教授
102097	笹内万里子	狩野教授	102154	中澤 勤	佐藤教授	102213	山中 純司	狩野教授
102098	笹川 朋幸	倉田教授	102155	中島ひとみ	パリーク講師	102214	山本 洋平	小栗助教授
102099	佐々木 聡	三浦助教授	102156	中塚 聡	八町講師	102215	湯本 修平	岩崎教授
102100	佐々木孝悟	浅里助教授	102157	永井 伸尚	濱田助教授	102216	横尾 真介	倉田教授
102101	佐藤 崇	浅里助教授	102159	西川 旭	土方助教授	102217	横橋 秀和	土方助教授
102102	佐藤 貴宏	浅里助教授	102160	野上由香里	濱田助教授	102218	横山 真里	松井助教授
102103	佐藤 達郎	三浦助教授	102161	橋本 英治	岩崎教授	102219	吉嶋 美佳	三浦助教授
102104	佐藤 知行	出村教授	102163	橋本 浩史	濱田助教授	102220	吉田 博之	橋本助教授
102105	佐山 絵美	狩野教授	102164	林 智香	橋本助教授	102221	吉田 浩之	小栗助教授
102106	猿山 裕子	有賀助教授	102165	林 俊宏	小栗助教授	102222	吉成真寿美	三浦助教授
102107	澤浦 雅基	佐藤教授	102166	半沢 一寛	佐藤教授	102224	若林 克友	若井教授
102108	澤田 博人	佐藤教授	102167	東山 育子	濱田助教授	102225	鷺津 武史	若井教授
102109	三本木雅宏	濱田助教授	102168	日比谷 哲	小栗助教授	102226	渡部ちはる	橋本助教授
102110	島田 里実	若井教授	102169	平栗 勇士	渡沢講師	102227	渡辺 秀一	出村教授
102111	島田 誠之	濱田助教授	102170	平島 大輔	有賀助教授	102228	渡邊 真樹	狩野教授
102112	下坪 武史	岩崎教授	102171	廣井 康男	千葉助教授	102230	渡邊 真光	出村教授
102113	白岩 永子	有賀助教授	102172	笛木 丈	清水講師	102512	納富 智子	若井教授
102114	白岩 哲男	土方助教授	102173	藤橋 裕二	千葉助教授			
102115	新関 智尋	土方助教授	102174	古川 博康	三浦助教授	092002	阿部 淑子	三浦助教授
102117	鈴木 悟	出村教授	102175	古屋佳奈子	倉田教授	092036	小河 僚	狩野教授
102118	鈴木 大介	松井助教授	102176	細川 薫	八町講師	092042	小原 一浩	若井教授
102119	鈴木 敏郎	出村教授	102177	本名 仁志	有賀助教授	092050	金井 啓二	浅里助教授
102120	鈴木 廣子	若井教授	102178	本間 千貴	濱田助教授	092055	川口 大介	浅里助教授
102121	鈴木 陽介	出村教授	102180	前田 悟志	松井助教授	092056	川村 真治	出村教授
102122	鈴木 亮平	出村教授	102181	増子 浩美	松井助教授	092065	國岡 明央	渡沢講師
102123	須藤 正	出村教授	102182	増岡 聡美	有賀助教授	092116	高橋 史明	出村教授
102124	清 利幸	若井教授	102183	松浦 慎二	松井助教授	092119	武田 康	八町講師
102125	瀬谷 直也	八町講師	102184	松倉 優貴	若井教授	092172	森 一平	大濱教授
102126	瀬谷 智子	佐藤教授	102185	松田 咲	松井助教授	092184	吉田 優子	若井教授
102129	高木 耕作	土方助教授	102186	松田 拓郎	倉田教授	092602	深山 拓郎	パリーク講師
102130	高澤 鉄平	濱田助教授	102187	松本 真吾	大濱教授	082027	岩崎 知之	浅里助教授
102131	高田 淳二	八町講師	102188	松本 竜朔	倉田教授	082161	中田 純一	大濱教授
102132	高橋 和章	春山講師	102189	真鍋 基彦	狩野教授	082164	中村 修文	大濱教授
102133	高橋 晋	松井助教授	102190	丸井 宗哉	狩野教授	082178	畑中 馨	出村教授
102134	高橋 直紀	出村教授	102191	丸田 暁子	千葉助教授	082187	平野 道徳	渡沢講師
102135	高橋 洋守	土方助教授	102193	南 岳晴	清水講師			
102136	高山 安洋	濱田助教授	102194	宮重 正敏	佐藤教授	072024	市川 克彦	渡沢講師
102137	滝口 美幸	橋本助教授	102195	宮谷 政之	倉田教授	072048	大沼 篤史	渡沢講師

新任の先生

兼担教授 関沢 勝一

担当科目:大学院・建築計画学特論Ⅲ



今、グローバルゼーションというカタカナが日本中を徘徊している。この現象は情報技術の発達によって急激に加速されている。最初は物流から始まり、現在では「社会・文化」の領域にまでその対象が広がっている。

日本の大学教育にもこの大きな波が押し寄せている。明治中期に制度化された大学教育は欧米のそれとはかなり異っているのは当然である。しかし、グローバルゼーションを押し進めると、各国がそれぞれもつ教育上の特色を国際基準によって評価することになる。建築技術者（エンジニア）教育の分野でも2001年から既に評価が始まっている。日本の評価基準は米国本国の技術者教育の認定に適用されている米国基準の日本版である。

さらにもう一つの大波が日本を目指している。それはエンジニアの分野よりさらに大きいアーキテクト教育のグローバルゼーションである。最低5年間必要とされる設計プログラムを現行の日本の「建築学科」中で対応することは不可能に近い。

助手 野内 英治

所属:構造系(倉田研究室)



学生のみなさん、はじめまして。私は平成元年から本学で学びました。大学院両課程を倉田光春教授のもとで修了したのは、平成12年3月のことです。その後、研究生としてさらに一年間お世話になりました。大喪の礼とともに始まった私の学生番号は012213。ベルリンの壁やソビエト連邦の崩壊、日本ではバブル経済がはじけ、阪神大震災、サリン事件、郡山では洪水もありました。しかし、その間も黙々と大学に通い続けました。出身は島根県です。そんな遠くからよく来なすった、砂丘のあるところですね（それは鳥取県！）とかは、よく言われる台詞です。本学との接点は意外に古く、父親も卒業生です。驚いたことに、倉田博教授（光春教授のご父君）のもとで卒研を終えたそうで、野内家は親子二代とも倉田研究室にお世話になりました。その意味でも本学は私にとって特別なものであり、本学の教員として学生諸君に接する機会を得ましたことを誇りに思います。私自身まだまだ学びの途中ですが、精一杯頑張りますので、みなさんよろしくお願ひいたします。

日本建築学会第46回東北支部研究報告会

日時：平成13年6月16～17日 秋田県立大学（本荘キャンパス）

- ・微動H/Vスペクトルによる微動の基礎的性質および地盤構造推定に関する研究
 - －郡山市地域における常時微動定点観測－ ○高井俊先（日大大学院）・倉田光春・Sanjay Pareek・梅澤元樹
- ・プレキャスト部材水平接合部の応力伝達に関する研究（その1：水平接合部実験）
 - 諸井洋平（日大大学院）・倉田光春・Sanjay Pareek・五十嵐賢次・渡辺興一郎
- ・プレキャスト部材水平接合部の応力伝達に関する研究（その2：鉛直接合筋による強度）
 - 五十嵐賢次（日大大学院）・倉田光春・Sanjay Pareek・諸井洋平・渡辺興一郎
- ・細長比をパラメータとする電鍍鋼管柱の局部座屈挙動に関する研究
 - 渋川恵里奈（日大大学院）・倉田光春・野内英治・山田誠
- ・構造形態と感性情報の定量化に関する基礎的研究～ニューラルネットワークと重回帰分析～
 - 茂木博之（日大大学院）・倉田光春・Sanjay Pareek・佐藤康行
- ・壁土の基礎的性質による産出地域別分類
 - －その15 壁土の粒度組成及び含有元素にもとづく産出地域別指標の提案－
 - 橘 浩二（日大大学院）・岩 博・八木美治
- ・壁土のタバコ煙吸着－分散特性
 - －その19 土壁と木材及び壁装材料等の室内タバコ煙含有有害化学物質の濃度比較－
 - 濱村幸司（日大大学院）・岩 博・田中啓一
- ・ガラスカレットを用いた化粧性傾斜機能透水舗装の開発
 - 出村克宣（日大工学部）・大濱嘉彦・佐藤文人・土棚久輝

- ・ポリマーセメントモルタルの空気量に及ぼす試験方法の影響
○五十嵐 太 (日大大学院)・大濱嘉彦・出村克宣
- ・炭素繊維補強ポリマー混入軽量せっこう硬化体の基礎的性状
○佐藤文人 (日大大学院)・大濱嘉彦・出村克宣・熊谷慎祐
- ・低ポリマーセメント比を持つ硬化剤無添加エポキシ樹脂混入ポリマーセメントモルタルの自己修復機能
○勝畑敏幸 (日大大学院)・大濱嘉彦・出村克宣
- ・再乳化形粉末樹脂混入ポリマーセメントモルタルの乾燥収縮に与える粉末収縮低減剤及び粉末消泡剤の添加率の影響
○大濱嘉彦 (日大工学部)・出村克宣・遠藤秀彦
- ・廃発砲ポリスチレン溶液を混入したポリエステルモルタルの基礎的性質
○崔 洛運 (日大大学院)・大濱嘉彦・出村克宣
- ・自動車の乗降動作と駐車スペースの関係
－身体を指標としたアキ寸法の計測研究30－
○若井正一 (日大工学部)・佐藤和徳
- ・公営住宅の居住者生活とコミュニティ形成に関する研究
－K市A団地を事例としての交流状況－
○仲澤秀正 (日大大学院)・松井壽則
- ・福島県公営住宅における住戸内居住環境と住まい方に関する研究
その1 冬季及び夏季の居住環境評価と住まい方について
○松井壽則 (日大工学部)・須田要介・溝井留珠・佐藤篤史
- ・福島県公営住宅における住戸内居住環境と住まい方に関する研究
その2 冬季及び夏季の温室度の測定調査結果と住まい方について
○溝井留珠 (日大大学院)・須田要介・松井壽則・佐藤篤史
- ・老人保健施設の空間構成に関する研究
－洗面所 (一般棟・痴呆棟) における職員の満足度について－
○郷間崇文 (日大大学院)・佐藤 平
- ・特別養護老人ホームにおける入居者の生活空間に関する研究
－H施設における共用空間内の配置物品の変更による居場所形成について－
○山本 渉 (日大大学院)・佐藤 平
- ・入浴介助行為時における利用者の誘導および滞留様態から見た老人保健施設の空間構成に関する研究
○古田部晃弘 (日大大学院)・佐藤 平
- ・高齢者余暇活動施設の複合化に関する基礎的研究
－介護保険における「自立」(非該当)判定者に対する地方自治体の取り組みと余暇活動施設の方向性について－
○伊藤知行 (日大大学院)・佐藤 平
- ・障害者のためのスポーツ施設に関する研究 (その2)
－身体障害者施設A型の使われ方について－
○山口貴広 (日大大学院)・佐藤 平・高桑健一
- ・リフォームヘルパー制度利用による住宅改造の実態とその効果に関する研究 (その13)
○佐藤 平 (日大工学部)・佐藤篤史・青柳浩司
- ・リフォームヘルパー制度利用による住宅改造の実態とその効果に関する研究 (その14)
○佐藤篤史 (郡山女子大)・佐藤 平・青柳浩司
- ・福島県K町ひとにやさしいまちづくり総合計画策定のための基礎的調査 (その7)
－やさしいまちづくりに対する施設主の意識－
○及川 剛 (日大大学院)・佐藤 平・田村誠邦
- ・児童への建築教育の可能性に関する研究
－総合的な学習としての実践報告－
○本多和恵 (日大工学部)・松井壽則
- ・住民参加のまちづくり (その2)
－「歳のまち」喜多方のケーススタディー－
○横堀剛一 (日大大学院)・有賀保二
- ・街並み構成材料の地域特性に関する調査研究
－その2 業務中心地区における都市の空間価値と外装材料の色彩－
○田綿隆文 (日大大学院)・土方吉雄・岩崎 博博
- ・既成市街地の地域特性と犯罪発生に関連についての研究
－郡山市をケーススタディとして－
○岡崎敏也 (日大大学院)・高橋岳志・土方吉雄・三浦金作

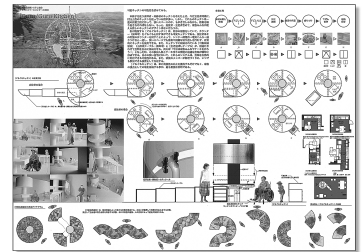
学 術 論 文

- Y. Ohama, "Recent Research and Development of Sustainable Concrete-Polymer Composites in Japan", Proceedings of the 10th International Congress on Polymers in Concrete, The University of Texas at Austin, Texas, May 2001
- T. Katsuhata, Y. Ohama and K. Demura, "Investigation of Microcracks Self-Repair Function of Polymer-Modified Mortars Using Epoxy Resins without Hardeners", Proceedings of the 10th International Congress on Polymers in Concrete, The University of Texas at Austin, Texas, May 2001
- S. Kumagai, F. Satoh, Y. Ohama and K. Demura, "Development of Artificial Woods Using Carbon Fiber-Reinforced Polymer-Modified Lightweight Gypsum-Based Composites", Proceedings of the 10th International Congress on Polymers in Concrete, The University of Texas at Austin, Texas, May 2001
- 五十嵐賢次, 倉田光春: 「プレキャスト部材水平接合部の応力伝達に関する研究」, 構造工学論文集, Vol.47B, pp. 549-556, 2001. 3

栗原院生、設計競技で経済産業大臣賞受賞

大学院建築学専攻の栗原 隆君(修士2年・若井研究室)は、社団法人・日本住宅設備システム協会主催のKitchen Space Competition 2000に作品を応募し、アイデア部門で第1位となる経済産業大臣賞を受賞した。応募作品は、「Guru/Guru Kitchen」というタイトルで可変するキッチンの可能性を試みた意欲作である。同授賞式は、5月24日に東京で開催された。なお、同君は、昨年、スガツネ工房主催の学生デザインコンペ(応募数350点)でも最優秀グランプリ賞を受賞(本誌106号に記事掲載)しており、今回の受賞はそれに続く快挙である。

(右図・応募作品)



■大濱教授は、3月31日から4月8日まで、アルゼンチンのブエノスアイレスで開催されたRILEM(国際材料構造試験研究機関連合) Spring Meeting(役員会)にCoordinating Committeeの委員として出席され、同時に開催されたRILEM Seminar on Modern Concrete Technologies and Applicationsで“Polymer-Modified Mortar and Concrete: Process Technology and Application.”と題して講演された。

■大濱教授は、4月1日、(社)セメント協会よりセメントコンクリート論文編集委員会委員を委嘱された。

■大濱教授は、4月1日に、日本学術会議材料工学研究連絡委員会より第45回日本学術会議材料研究連絡講演会実行委員会委員を委嘱された。

■若井教授は、(社)私立大学情報教育協会より建築学情報教育研究会委員を委嘱された。(4月1日)

■大濱教授と勝畑院生は、5月21日から5月27日まで、ハワイで開催された10th International Congress on Polymers in Concreteにおいて、大濱教授が“Recent Research and Development of Sustainable Concrete-Polymer Composites in Japan”及び勝畑院生が“Investigation of Microcracks Self-Repair Function

of Polymer-Modified Mortars Using Epoxy Resins without Hardeners”と題して講演された。同国際会議において、大濱教授は、コンクリート・ポリマー複合体分野における長年の業績に対して、Owen Nutt Awardを受賞された。

■大濱教授及び出村教授は、5月9日に、(財)日本建築総合試験所から外国人研修生8人及び日本人引率者2人が研究室を訪れた際に、講演及び実験のデモンストレーションを行った。

教室ニュース

■大濱教授は、5月1日に、(社)日本コンクリート工学協会より研究委員会委員及び廃棄物のコンクリート材料への再資源化研究委員会委員長を委嘱された。

■大濱教授は、5月25日に、(財)福島県産業振興センターより技術支援審査委員会委員を委嘱された。

■大濱教授は、5月18日に、(社)日本セラミックス協会より永年継続会員賞を授与された。

■土方助教授は、5月18日に、福島県より福島県景観アドバイザーを委

嘱された。

■栗原院生(修士2年)は、(社)日本住宅設備システム協会主催のキッチンスペースコンペにおいて、アイデア部門で第1位となる経済産業大臣賞を受賞し、5月24日に東京で表彰された。(詳細本誌)

■若井教授は、福島県より福島県建築文化賞審査委員会委員に再任された。(5月29日、任期は2年間)

■岩崎教授は、6月1日に、国土交通大臣認可の(社)全日本建築士会会長に選出された。

■建築設計資料集成(日本建築学会編)が17年ぶりに全面改訂され、同編集委員長の高橋講師(大学院・非常勤)の監修による総合編が、6月1日に発刊された。

■土方助教授は、6月4日に、郡山市より郡山山公共事業評価委員会委員を委嘱された。

■若井教授は、東北インテリアプランナー協会の総会において、会長に再任された。(6月9日)

■人事:古市講師(大学院・非常勤)は、千葉工業大学教授に就任された。(4月1日付)また、湯本講師(大学院・非常勤)は、九州芸術工科大学教授に就任された。(7月1日付)